

Title	母語話者信仰を支える「言説」批判：日本のドイツ語教育に関する分析を手がかりに
Author(s)	中川, 亜紀子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49476
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

本論文は、異言語教育／学習において常識となっている母語話者の優位・特権性という主張について、その正当性を批判的に考察しようとするものである。その論述に当たっては、まず前半部分で、筆者の実施した日本のドイツ語教室におけるフィールドワークの結果、社会文化的な背景知識の所有が母語話者信仰を支える主要な根拠となっていることを確認している。次いで後半においては、そのような母語話者信仰の言説を、教授法としてのコミュニカティブ・アプローチ、異言語教育における権力・言説・イデオロギー、言語と慣習との関係という個別テーマの展開に即して吟味し、母語話者の優位に繋がる議論がいかに関心の思い込みによるもので根拠に乏しいか、その矛盾を指摘することによって、最終的には、「柔軟で寛容な」異言語教育／学習の可能性を示唆するに至っている。

このように、従来英語以外の言語についてはあまり主題化されることのなかった「母語話者を絶対的な規範と見なさない外国語教育」の考え方について、ドイツ語を対象として詳細に論じたことは、本論文の有する斬新な着眼点であり、言語と文化との関係の本質をめぐる考察という点において、理論的・学術的に大きな意義を持つ。また、新たな教育実践の可能性を示唆するという点において、本論文は社会貢献の上でも有意義な研究といえる。さらには、母語話者を絶対視する思想の淵源について、先行研究よりも深く掘り下げて考察していることも高く評価できる。他方、本論文の知見を教育実践に還元する道筋についての議論が不足していること、また、母語話者信仰を支える「カテゴリー化」・「慣習」等に関する言説を取り上げる際に、その言説構成の分析がやや性急に批判へと傾斜して、論理性に不十分さが散見されることなど、若干不満の残る面もあるが、それらの短所も上述した本論文全体の積極的な価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。